

曹洞俳壇

選・村松五灰子

短夜みじよを通り過ぎ行く始発かな

神奈川県 小田喜信博

評 夏の夜は短い。夜明けとの狭間に聞く始発の電車の音。

「通り過ぎ行く」に響きと繊細さが余情を深めこの一句の格調を高めている。

大漁の鯖を炊きたる地味噌の香

岩手県 阿部 鯉子

評 太平洋沿岸の黒潮に乗って北上する鯖は秋近く岩手、青森に至るころ、脂がのり最も美味しいといわれる。慣れ親しんだ地味噌の旨味と香りの滾あわりが一句に充滿。

◆箱根八里山が笑はば膝も又

東京都 伊奈 三郎

◆梅雨つゆ滂沱ほうたの小さく病みこもる

宮城県 鎌田登喜子

◆ゆすらうめ愛かなしみさへも懐かしく

静岡県 堤 千春

◆頬杖の何を見てゐる若葉雨

埼玉県 中島 新一

◆孫子らの戻らぬ家の鯉のぼり

茨城県 鈴木 米征

◆山なみを一筆描きの夏茶碗

新潟県 森村 ひろ

◆手甲の指先いとし茶摘かな

静岡県 水口 淳

◆病室に届けし義母ははの更衣

愛媛県 能仁めぐみ

◆夏暖簾ひどひくぐり一日をはじめけり

北海道 堺 隆

◆大方は田植終へたる日曜日

長野県 下島 博

*選者吟

川霧や母胎に記憶あるやうな

五灰子

*作句小見

心の中の喜び、歓喜、叫び、絶叫、悲しみ、淋しさを十七文字に託し一句。それが吐息。それが僅かな救い。作り続けることで生涯俳句に救われ続けて行く。俳句は救いの文学とも私は考えています。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

ふるさとの大明小路、曲尺町障子と格子の

涼しき岩国

山口県 中井 清子

評 錦帯橋で有名な岩国は山口県東部の城下町。塩や魚等の食料や、材木・鍛冶屋などの職業名が町名に残り往時の繁栄を伝える。そんな故里を誇りに思う作者の心情が、町の佇まいを象徴する「障子と格子」に季節感を添えて詠われている。

明け方に生徒を探す夢を見る過ぎし記憶に
面影追うも

埼玉県 新井巳喜雄

評 如何に誠心誠意生徒に対して来た作者だったことか、退職後の夢にも教師としての時代の苦勞が影を落とす。明け方の夢は覚えているという。下旬の状況がよりリアルである。

◆ 撒水の水の穂先に雨蛙めざめたるごと鳴き出でにけり

大阪府 高畑 良圓

◆ 春泥を踏みつつ来りて御社に地震なきことただに願ひぬ

熊本県 島田 佳可

◆ 闘病の合間に君が接ぎ木せし新品種梨花咲かせたり

鳥取県 山本 浩一

◆ 川風を袂にふたりそぞろゆく祭囃子を遠くに聞いて

東京都 野村 信廣

◆ 姉に梳く別離の朝の九十九髪わが手の内に握るほどなし

秋田県 小田篤恭葉

◆ 古里の路地の表札見て歩むかすれた文字に友の名探し

広島県 小畑 宣之

◆ お母さん、呼ばれしように足止まる雉鳴く声か黄泉の息子か

茨城県 出雲 則子

◆ 立春の陽の射し初むる田や畑ゆ地霧立つ見ゆわが里豊か

鳥根県 横山 颯吾

◆ 大き翼高き階の窓をすぐ退院祝ふか扇にも似て

愛知県 田中 澤子

◆ アールグレイ好みの味には遠けれどただあの人と飲みし
思い出

新潟県 今成 愛子

* 選者詠

百日前の手術も忘れ呆けゆく父よあなたに
寝められたき娘

ちづ

* 作歌小見

雉の啼き声は鋭く心に残りますが、その声と「お母さん」と呼ぶ亡き息子さんの声とを重ねた出雲さんの一首が哀切に響きます。片時も忘れることのない母心が捉えた東の間の魂の交感だったのでしょう。短歌の力を思った作品でした。



大本山永平寺



御征忌法要風景

御征忌

永平寺では、九月二十三日から二十九日までの一週間、ご開山道元禪師さまをお偲びする「御征忌法会」を営みます。

道元禪師さまは、京都で療養の中にお亡くなりになりました。それから十日程過ぎて、二祖懷奘さまは、道元禪師さまのご遺骨をおさめ、永平寺へ向かわれます。懷奘さまは、五日ほどで永平寺に到着し、二日後には入涅槃の儀式を営まれました。

懷奘さまは、どんな思いでご遺骨をおさめ、おつとめをなされたのだろうかと思いを重ねるものであります。

さて、道元禪師さまは、お亡くなりになります年の始めに『正法眼蔵』「八大人覺」をお示しにされました。

『正法眼蔵』「八大人覺」とは、お釈迦さまの最後のみ教えである「八大人覺」（八つの仏陀の威儀作法）を、重ねてお示しにされたものです。この「八大人覺」を丸ごとそなえた修証は「坐禅」です。

私たちが、姿勢を調べ、呼吸を調べ静かに坐るとき、お釈迦さまはじめ、道元禪師さまと共にあります。ですから「坐禅」を修証することは、そのまま真の御征忌の姿であります。

長月の夕べに月を見上げ、道元禪師さまもこの月を見ただろうかとお偲びし、坐禅堂へ向かうのであります。

ご本山だより



大本山總持寺



CP会議風景

修行僧の心に寄り添って

九月は秋のお彼岸会を迎えます。總持寺ではこの期間、毎日午後一時から法話・二時から施食会法要を勤めます。特にお中日の二十三日は江川禪師さまが大導師をお勤めになられ、大祖堂は大勢の参拝者でいっぱいとなります。

さて、總持寺では現在約百三十人の修行僧が安居あんごしています。日々の行履あんり（修行生活）を健全かつ丁寧ていねいに勤められるよう、「ケア・パートナー制」という制度を導入しております。

これは、寮舎ごとにケア・パートナー（CPと称す）という役の修行僧を置いて寮員一人ひとりの生活の様子に眼差しを向け、何かあれば相談に応じるというものです。

毎月一回、全役員とCP担当の修行僧が出席して「月例CP報告会」が行われ、各寮からの報告や提起された諸問題を共有し、その解決を図るようしております。

また、鶴見大学先制医療研究センターと協働して「臨床宗教師育成講座」を設けております。これは僧侶として「ひと」を知り、コミュニケーションや技能の修得など「傾聴と受容を学ぶ」ことを目指すものです。

更に、修行僧の送行そうあん後の進路を相談し支援する「大衆支援室」が設置され、社会と共に歩む僧侶の育成を図っております。